6. 血管撮影・IVRの感染防止策について

市田 隆雄 大阪市立大学医学部附属病院保健主幹兼中央放射線部技師長

大阪府では知事の要請の下，5大学病院を含む16の医療機関で新型コロナウイルス感染症の重症対応が始まった。大阪市立大学医学部附属病院は，2020年4月17日からその中の1医療機関として稼働した。病院当局は働く医療従事者を最大限に守るべく体制を十分に整え，かつ一般患者に可能なかぎり支障が生じないよう配慮をして，特定機能病院の機能を維持することにも留意した上で責任を全うした。45日間の政府宣言の期間での当院の行いの詳細は，報道機関を通じて公表している。本稿では，この間，血管撮影・IVR（interventional radiology）で整えた体制について記述する。なお，その後の今日までの動向は，守秘義務の観点から情報整理した上での執筆となることをご了承いただきたい。報告可能な当院での対応，そして学術団体などを通じてIVR関係者に発信している内容を併せて記述する。

IVR部門のとった考え方

コロナ禍で騒然とする3月から，IVR室とそこに携わるスタッフにとって新型コロナウイルス感染症患者への対応は喫緊の課題ととらえていた。CTやポータブルX線撮影については専門機関から感染防止策に対する多くの知見をうかがえたが，血管撮影・IVRの実施にかかる感染防止策はまだまだ集約されておらず，おのおのがガイドラインを読み解き，そして現場に合わせた運用を入念に検討し臨床に反映していたと分析する[1]。

当院では，日本心血管インターベンション治療学会，日本インターベンショナルラジオロジー学会，日本脳卒中学会，American Heart Associationから公開されているガイドライン[2)~5)]を基に，新型コロナウイルス感染症患者への血管撮影・IVRの実施について検討した。本稿では，当院の血管内手術・IVRセンター（血管内手術：患者および家族にわかりやすく命名した当院独自の呼称）での運用と経験を紹介する。

IVR室の選択と準備

患者・従事者における感染対策を最優先ととらえて，次のとおりの準備を行った。

1. IVR室の選択

当院でのIVR室は，ハイブリット対応ができる装置を含めて4部屋ある。新型コロナウイルス感染症患者への対応は，床面積が広く，汎用性が高い装置（Artis zee BA Twin：シーメンス社製）を備え，かつ救命救急センターに直結するIVR室に決定した。平時は放射線科，脳神経外科，循環器内科がIVRを実施している部屋である。

2. ゾーニング

患者対応を行う汚染エリアを赤，個人防護具（以下，PPE）の脱衣を行う準汚染エリアを黄，PPEなしで診療できる清潔エリアを緑の3つにゾーニングすることとした（**図1**）。IVR室の運用ではこれに加えて，汚染エリア（赤）内を通常どおり検査/IVRを行う手技エリアと，支援を目的にIVR室内にとどまる従事者のためのスペース（放射線防護エリア）に分割している。これは，従事者の被ばくの低減と手技中の入退室を減じる工夫である（**図2**）。また，このゾーニングによる区分は床面をテープで示している（**図3**）。

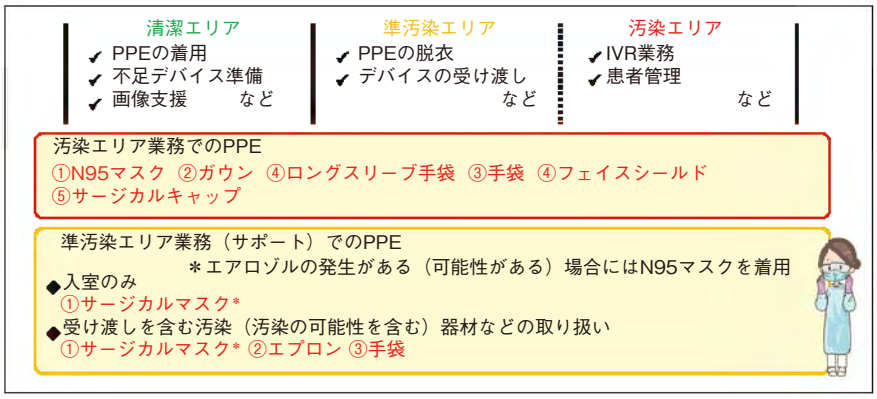

図1 各エリアでの感染予防策

〈0913-8919/20/￥300/ 論文 /JCOPY〉